

增見遊覽記

卅三下

		和書門	
二九	一五	二九	一五
一七	二六	一七	二六
六	九	六	九
冊	架	函	號

庫文閣内		和書	
二九	一五	二九	一五
一七	二六	一七	二六
七	八	七	八
冊	架	冊	架

内閣文庫	
番號	和 29157
冊數	78 (33)
函號	177 901



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



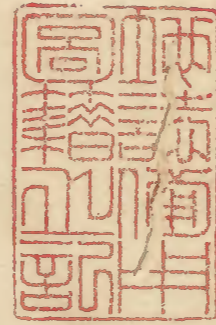
© Kodak, 2007 TM: Kodak



美香齋の巻紙校
三十三
比由

梶の葉流はよりりめ 狭股乃繼橋と傳 鳥總立ち有
事と見 杜良岳まのり 鹽の井 境の社 鎧のやいり
芒北郷 連枝鴨跡葉樹 田代の沼 額齋の祭カヒカヒ
船木山 鷓鴣石 猿淵 ちんちん 埴輪 立物
りりがるふま ちんちん 頭鎧のあこふちんちん
此ゆり人の號と。みり色の鎧。とらやうか。





四一〇九五八

布美通岐の相の傳の國比内の郡。櫃崎乃由り子
まめ好。麻呂田北屋戸小夜經よりまひひして。あつれ
あし。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。

あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。

あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。
あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。

宇地主母智とてふを句の上よおひく。

ちよひしちよふふわわつれんこのおもせく
ちよひしちよふふわわつれんこのおもせく

四日此都差企てひねり出らぬのゆゑ館とて大譽田
のあはれ神を齋すその地の飯櫃お終れど。河埜とてはひ
今村の名小ねせん館のぬい誰を東島舎西島屋とて思ふ
雁島屋とて村あり天長むと八森山野代。出茶澤をとり
とて鶴島鶴のいともぎとて秀吉あはれん手鶴とて鈴井といふも
此内多知度夜れとてまもわらんといふもあつたてを赤石
のちよひつて正壽院のらん悟峯の庵とてあり。ちよの神の
ひり前よあつたてとてちよひねれ。いともわつれんこのおもせく
夕月のこゝりしつゝ悟峯あるあり。ちよの夕月夜とてく



小福は真向すやる月の顔。ちよひあ

そねうけり。和曾せり。唐麻丸年一虫と在風
七日委氏賀賀波は在うしてひより川道違てらん。ついで
の集ひ草摺の茶とてあつたてとて水も探りあつたて。

二里あつたてとてひの年酬とてあつたてとてあつたて
かろ流をえん。ちよひつて。え。晴れとて。

銀河まらち。ちよひつたてとてあつたてとてあつたて
ちよひつたてとてあつたてとてあつたてとてあつたて

あつたてとてあつたてとてあつたてとてあつたて
あつたてとてあつたてとてあつたてとてあつたて

海をこし鳥。口もさうか宛てめつ
十日卯の枝ありて海とありの里にわらひつれりあきまの地をは
てしえあまの馬の瘡もや無縁瘡を若をひわして
まんじやゆひ五女のしらふ門もあまのひまの移れを
覆槽としらもうちんかんとあしんののさとのこ
あし海のこまを語むつるはりのみと瘡のあしめぬ
まんじやゆひ五女のしらふ門もあまのひまの移れを
まんじやゆひ五女のしらふ門もあまのひまの移れを
まんじやゆひ五女のしらふ門もあまのひまの移れを
まんじやゆひ五女のしらふ門もあまのひまの移れを

曲澤のやう





波都企の六日。阿仁の庄河井のやうなをあらう。世原と
 けふ。ちや草てすのしり。あつたのくけ群れ
 まちて。ゆづり鐘。こころまふ。小坂。小せ
 蕨のやうな。小草。かき。今をけりて。昔形のやうな。あ
 め也。あつたを立けりて。あつたを。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ちうせり。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の村。瀨の鎗の村。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 五方。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 いて。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

わふれ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 山。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 路。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

きひらに多ぬ。青かや。鬼くわ。おま。やわ。あま。りり
つ。の。退。馬。の。あ。ま。連。り。青かや。ひく。き。を。ひ
鬼くわ。萩。か。て。あ。ま。ま。ま。か。わ。その。ま。ん
萩。か。あ。ま。ま。小。河。乃。あ。ま。ま。ま。ま。村。の。見
ま。下。船。木。と。み。村。ま。ま。ひ。み。中。宿。ま。水。飲。ま。ま
李。ひ。ろ。ひ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
上。の。下。し。村。ふ。り。ま。ま。上。船。樹。の。ま。ま。ま。ま。ま
鈴木。多。左。衛。門。と。み。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
川。井。村。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
七日。つ。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま

見。ま。ま。南。面。太。多。羅。の。む。つ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
山里。の。見。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
大。橋。矢。櫃。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
策。應。明。晉。の。こ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
長。崎。の。た。り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
あ。ま
田。井。水。ひ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
ま。ま
安。佐。利。統。の。墓。碑。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま
あ。ま

不梵形の花畑は。中。庚申塚とある。喜加吉の
とせ。あつたふゆと。さうれと。そのうらふ。のむ。
よ。あつた。あつた。阿佐利の興。一。む。甲斐の國。より
み。北にふ。北の飽田。つり。桐。城山。高。本。の。木。
あ。は。は。の。子。大保内権助。の。の。の。の。の。の。
権助と追。白澤乃山。奥見内。小。の。の。の。
親。あ。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
住。つ。阿佐利。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
多。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
も。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
足。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

松澤よりそのやうのもを。不見。雨の。の。
澤水谷川と。流れ。を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。ひく。炭の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。その。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。籠の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

是の嶽よりある山を登りて見れば、
 遠くは、
 本林寺村の山ありて、
 山に、
 渡りて、
 八日、
 樽草と、
 栗桂と、



舟木村と云く
 射島の汲中よ
 大黒森
 小黒杜
 市渡の村あり
 夏あけの山にのり



安和利也万多の
少くもいふに
浅利統の柵家
せしむるは
まじいし





萬須多郡
鱒の魚はめくく〜いり
此まけの老く〜を採〜
山賊のわら〜をせ〜り。

まにまに〜を〜の〜支連〜んを〜めれ此草
津輕耕田岳採り〜め〜し此山まで見〜高〜多々
山根多う〜にありなれ〜前嶽〜も〜。これ横路
〜〜〜の〜の〜の〜黒倉〜真木の〜
〜の〜の〜の〜松山賊〜
〜の〜の〜の〜島羊山都〜の〜の〜
毛呂美〜。櫻の本〜の〜の〜の〜靈櫃の
お〜風尾松小〜の〜の〜の〜
ゆ〜の〜の〜の〜の〜の〜
あ〜の〜の〜の〜の〜の〜
火〜の〜の〜の〜の〜の〜
あ〜の〜の〜の〜の〜の〜

のちうきとくまひのく真木あやうりつと在る。岩浪澤の
おふもありたり。三河川のま体しひく。

くふく日とぬらふふ海川のいんちのみをかく
まふちのちん。紫芋形しを石のみを式大を石神
やいもりとのりくそん。高橋とわたりて。突内といやう
のりり。赤前の西の傍。破つひふ可突内といやう。江差の港は
遠くあり。かくむ名。多治。何なる。うま。て内。澤
て。あ。と。い。蝦夷の辞。か。て。む。く。住。つ。ん。
伏魔のやうと。中。場。金。兵。衛。と。い。ふ。体。し。ひ。
山。び。の。越。れ。を。榎。子。と。い。ふ。村。は。萬。多。香。と。い。ふ。
あ。く。冬。や。と。い。ふ。獵。人。の。宿。軒。と。い。ふ。又。鬼。の。長。塚。
傳。入。巻。物。と。い。ふ。彦。火。火。出。見。尊。と。い。ふ。遠。つ。と。想。と。引。ん。

それうつう山辭のうちの傍の山と幸肉といひ米と丹
の實といひあけ蝦夷詞といひ佐藤利右衛門といひ地ぬの
りふ宿つたりと國小庄屋ちあやとあけ肝やといひ地ぬの
きよの次を村長といひる。ふゆの月とあけとて軒端
棚とあけ。新築。瓜の葉とあけ。と露。稻穂と
三つとあけ。神酒とあけ。こま。神代といひ。あけ
とあけ。月の神とあけ。とあけ。とあけ。

ふ向つれわをのう。ねあ。と。あ。け。あ。け。あ。け。
月のうはあ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
くれとあ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
十六日とあ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
銀山のう。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

四月五日人々皆驚きひくも修り。
 廿二日午時より申時水無の舟小舟ありて人々を乗せしり
 のりて大蛇岬。赤熊あり。あやうきものありて
 米内澤のりて市路小舟北里小舟。猶田をけり。嘉
 右馬頭重盛。仕て惣之五郎とあり。重盛の父常陸
 道春清と功あり人々。右馬頭重盛。ちち死後より。先
 祖宗良。惣之五郎光豊。米内澤。時をめぐりて。あはれし。の
 箱のりて。あはれし。たて。及。せ。れ。け。れ。あ。は。れ。し。の。り。て。あ。は。れ。し。
 此度九戸左近將監。政實。依征伐。蒲生忠
 三郎。氏卿。為先手。来八月二日。及。惣之五郎。之
 余。仙之。筋者。因遠近。三人。任軍役。今。出陣
 可有忠勤也。何。心。併。 天正十七年 七月朔日

考吉花押

小笠原右衛門左

然以候。中。進。以。今。度。同。氏。小。次。郎。御。之。
 刻。貴。殿。内。介。成。故。首。尾。為。合。合。後。初。陣。之。
 仕。合。之。遠。近。恩。以。一。族。之。大。共。 勝。斗。小。書。向。
 治。色。草。毛。馬。進。之。出。 上。了。海。之。

五月晦日

松橋形部少輔

赤良園惣五郎松

盛光花押

あり。城。介。實。季。書。翰。あり。あり。た。も。安。東。自。不。
 一。の。あ。ま。り。し。つ。れ。と。く。
 明。後。日。者。奥。以。一。下。り。合。戦。之。後。衣。河。三。ら
 之。り。あ。い。事。前。方。へ。指。々。去。可。中。我。と。相
 心得。仕。度。可。得。致。し。れ。そ。 正。四。月。二。日。義。経



かく蔵坊に
 ても銀女里の相替るたり。源之位頼政の手
 を書ける。念佛徳夫義父冊子のひり。何れ道に流ぬ
 此市の師なるふ。銀山の三せとて母のふれとつらと昔
 つらに流ぬ。いふとつてせ。あの方。あつめて
 川井の村よつた。



母瑞譽斯 云々峻あを
 逸の腰としの 前岳を央よりて
 後岳ありてくくれば向嶽としの
 迎禮毛の多世より
 蝦夷子似たり



保利巨てのあはれ
 子等が火をせり
 忠責のうもあはれ
 えりり各あはれ
 作火とせり
 見せり
 本國風土器
 七葉樹澤
 見せり



神日本磐余彦天皇の
 十一代垂仁天皇三十二年乃
 秋七月甲戌朔己卯
 日葉酢媛薨天皇詔一
 君卿りして曰死人ヲ志
 道ニ依リてカ
 也知れりい
 進曰それ君王の陵墓ヨリ人ヲ埋み
 立つたがや。豈得傳後葉乎
 願令將議使事土部壹伯人
 自領上部等取壇以造作人馬及
 種種物形獻于天皇曰自今以後
 以是土物吏易生人樹於陵墓焉
 後葉之法則天皇於之大喜之詔野見宿禰曰
 汝使儀寔洽朕心則其土物始立于日葉酢媛命之墓也既是土物謂壇輪
 亦名立物也今令と正てのこまりの今陵墓ヨリ
 土物と樹て人多傷りそ天皇厚く野見の宿禰のいさめを賞めり
 亦鍛とてとて即土部の職は御多の因てりとの姓と土部の臣と謂ふ是土部連等
 主天皇哀華之緑也所謂野見宿禰是土部連等之始祖也

波通王 多底母能



真杵樂
 土部



此の年月の四日。おのやうふとを。加藤あふのーに。さ
るる。さるる。これ。小川より。舟出して。大河より。出く。
川井の村を見さく。舟とく。渡りて。七倉山。ある。天神の森の。つら。
左。名。柄。作。た。て。み。て。秋の色。つ。見。え。あ。い。海。井。れ。や。ふ。さ。
つ。く。村。長。秋。林。た。く。れ。い。ふ。ひ。く。日。も。つ。あ。ぬ。
此宿の。砌。は。朱。の。雞。栖。の。立。ち。あ。い。船。豊。受。媛。と。齋。ふ。
時。も。あ。ぬ。さ。や。手。馴。む。を。ぬ。く。秋。の。布。ふ。
沙。ぬ。も。さ。ら。糸。あ。く。さ。れ。あ。り。
五日。二。船。の。さ。ふ。ふ。進。む。と。ころ。舟。つ。ら。く。あ。り。ぬ。七。倉
の。山。を。ひ。く。か。在。る。坊。壽。と。ふ。か。と。り。ふ。の。お。ゆ。か。
ふ。壽。五。舎。と。い。あ。い。佛。薬。師。觀。音。せ。し。地。蔵。の
つ。ら。く。と。神。と。い。て。あ。り。ぬ。鳥。居。あ。り。ひ。ん。ふ。

流れ寄り味とありふりありていそあ神と祭ひとも傳り
義経記に云ふ明神より明神とありつたおと書か
そのゆゑ最上路をのりしりも有りける此社の蛇陸奥
のちれみ五徳明甲を作らせり家の後尾宗次
弟子の六一入道天喜のちれひ作りよりかみ
器なりあしきくらのおのりて寛政のちれみ
これとをまんとてのりして社よりあつて寄せ
ありしちりて蛇社と君々のちれ額をとりて
とありあ切石のちれおや里を遠き世に嫁深しひり
むり船泊の宿とひ村のちれやうのちれひ世と
ありて居山のちれは石工の業とひ村と切り石とあり
神吉利石明神と云ふなりと老ゆのちれ村長と藤

名居つしりちりちりちり舟泊して田畠路つち鏝の
明神の杜と云ふ曹八種井の村ありて泉光院の家
つれと火のあつちりちり盗人のちれおのりて
社よりちり大なる柳の本樹とありて株ありて
ひりちりちりちりちり柳木とありてありて
ありてちり田の字のちりちりちりちりちり石の
鏝作りてちりちりちりちりちりちり松盛の花の
田生の中ちりちりちりちりちり秀草子狗尾草と
ありてちりちりちりちりちりちり白蛇とありて
ありてちりちりちりちりちりちりちりちりちり
五六とちりちりちりちりちりちりちりちりちり
一のちり田柳とありてちりちり薄井と今の村の名とありて

りて北井野の村の近つて寺ありむし十王堂のありありと
大平山長谷寺とく真言の僧侶のあり慶安乃
つ小天徳寺の十二世 和尙開山とて天神の社も
追々なり天神山清徳寺と天徳の二此文字をわづらひ
出名寺の名と改て宗圓の家とあり寛永八の年乃
あり西に道人筆記せられ碑門にありて此方なり
石の面の管滅しよみとたりとありて多かりし
維寛永粹之春一部長左衛門尉家次踵門
而告貧道曰羽州北井野開葦之功甚大矣
願得師之文刻諸石而永為不朽貧道呵
云咄哉你出去今時之為人臣者惣似這
般 後無時税歛無度辟土地而樹功府

以涯忠便田我能事君辟土地充庫財功
不浪施。苦屈古人云今之所謂良臣者古
之所謂民賊也。哉斯言吾聞上古之為人
臣也憂則先民而憂樂則後民而樂思民
之有弱者由己溺之也思民之飢者由己飢之也
是以與民同飢寒與民等苦樂你不聞也
禹稷當平世三過其門而不入其急如是
也豈可與你輩同日而。曰豈得以隣有
兒而遂己之煩花他家有佞臣自
家之忠士乎其各雖同其功各異請詳
察焉貧道曰你之辟土地其志何如你之
主緣并成功之始未委悉與我説曰我是

大平之至綠平氏之末葉也為人好辟土地之道。塗凡見廣野大澤輒規度指畫耕墾之地一得仁君而欲施成功而已也。爾則梅津苗裔憲忠高弟主馬亮政景性寬仁而有
大度常懷世之志
國君秋田中將
好其風操而以政事委焉政景既執國家之柄以公滅私垂惠布政義謂門而伸素志因。以司農舉申午春以勸農故到於山山之陽有荒原號比井野其境任而其地美矣我以狀聞政景欣然遂發倉粟散庫財以資象力之施功於是。作而盡思勤力而勞心折其地之可耕墾點其水之

可灌築壑決排計畫功績遂歷三寒暑而成矣加旃封疆之內墾辟之地不可勝計矣所以處。其田美而多家其食足而有餘於之州民益富國家大興宣曰小補之乎古云富國大司農其斯之謂與輒揮毫而勤其所說以為諸序其辨曰

洪荒之世	天下不知	一草一水	有溺有飢
聖人送興	漸次淳治	二。誤跡	萬靈展眉
九穗競秀	十葦鬪奇	祥可淳淳	瑞氣。
寒暑迂謝	世道陵夷	野有餓殍	處無常資
南北泣岐	廣黑悲絲	時維我國	立太平基
量邦當寸	補箇大司	大興田宅	無地不苗

平彼大野 渺而無涯 奉奇溝 空塘怪堤
 流虹諸山 浮龍迴崖 引水之設 既灌之施
 機巧入神 功出慮知 祭而沐雨 飆以梳颺
 戴星而往 佩月而回 三嘆霜葉 九月秀芝
 响响魚濕 靡有遺 經界并地 清涵吟時
 畫畫盡善 可象可親 則地之判 察天之時
 田無妖穉 只無凶饑 久旱無侵 濟水無壞
 合鎮千秋 連莖萬斯 是盡膏澤 涵億世黎
 不朽功名 報永劫焉
 昔寬永八年 耕 孟春良辰
 太平山住菴僧西江道人謹書
 墓碑 高八尺三寸五分 厚一尺六寸

清徳寺に出る。屋戸のあはれし秋元加藤のにり。これれ
 もつらつあつかりは薄井小末れ。そり火堂は
 誰の袖も露そち。縁風よりむくす。その
 星のちりくれ。夕附夜れ。ちりり。らく宿小。あがり。



二新邑の五社の社
大樹の銀杏あり一本
勿乳とよしの木として
ねのしの依りま
乳節と樹。

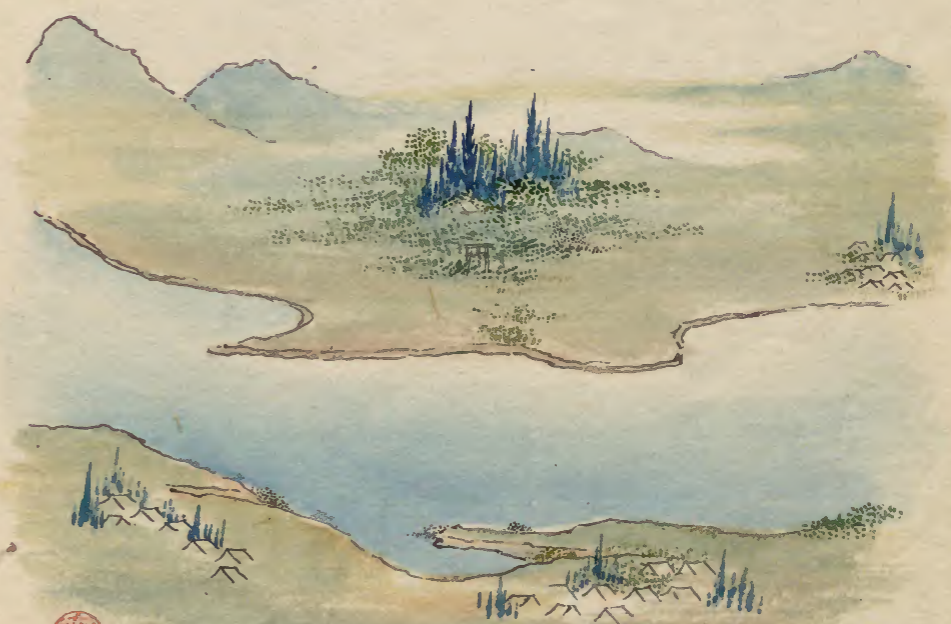




連枝鴨蹟葉樹 男木 妾木



五社の森ハ 薄井村と
比井埜邑との川のひらひ
ニ 鯉村の在り



切石村の井鹽
大踏とりの山
里のまゝ在り





切石村の七折山の麓飛来山
 のこまごま兜明神の社あり 潮の井
 二軒 小懸やとみ村と
 いふく 鬼鹿毛と名たぬ馬の
 産れより 鬼神邑の
 嘶の澤も又やられぬ



此のてあら作りありてまゝりしをいふ歌に歌えつく。
 山にありてのひともしりしとていふちあやむく濃く
 色つたぬれと。横子内とよ坦つひてめえ伏籠
 の田舎もを相あし。もいふと見あり。戸ひく石を見つ。
 弓手小ぬるあつけ。懸石。小滝とせふ。提の口をせ
 見つ。鬼神の村とあり。又鬼鹿毛の嘶の澤に龍も。あ
 と真盛の糸をぬく。小懸村のいふ。二鮎の村にあ
 舟渡りして薄井ありて。秋林のともふつたあり。

阿仁の羽根山邑の奥小
 澤波多地にて出あり
 山里河、白地山小はあり
 麓中にていふあり
 と。あやむくつたあり



其一



田代の潮

阿仁の田代の村の
山中の在り
みづささりかき
池塘盡のみと多く
さし魚のあき
精進浮法師は
新阿まもい名
あしとあし
海傍の里人のれと
金樹の紅葉い
松杉檜の木の
外とまの木の
とやまの金堂
やりのまの木の
あしは坐實のもの
いふつとわとら
つらん



多斯呂賀太
のり龍と係り
おちくちとゆ後
しつし

其二





二 齋山の源に鴈石
ありとて人の心と
を此の流に山半と
少きとて山半の
流をそめてあは
き山脈



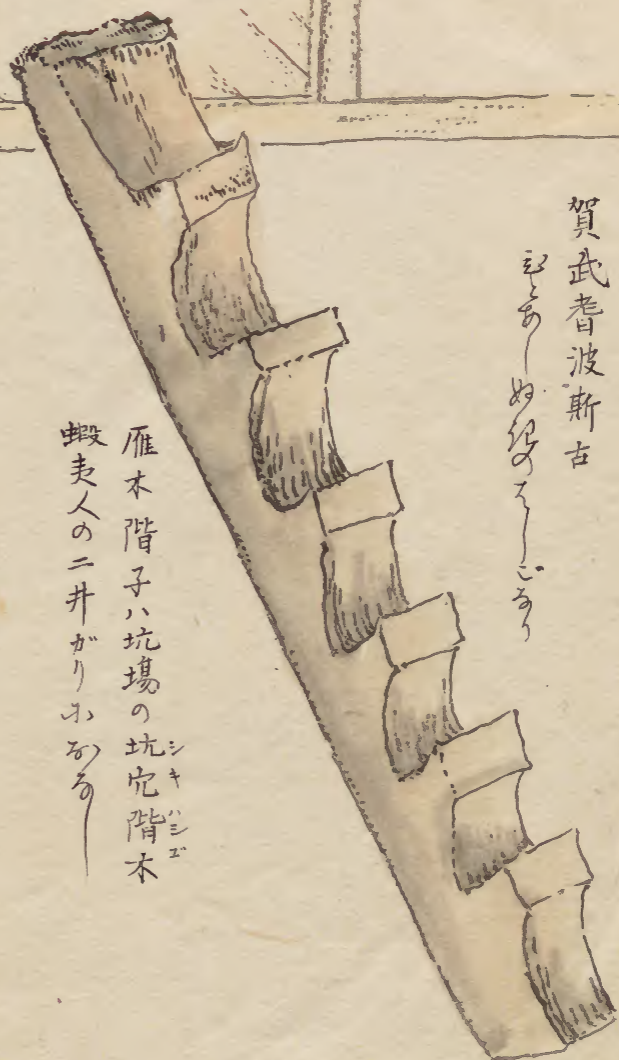


逆舟系ま出山路
接洲の山と云う
あつらひの山
四の丸本橋より
みちの津軽の
鳥鐵の浦あり
四枚橋ありと
あり

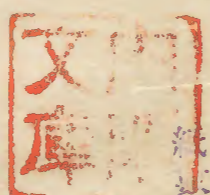


賀武耆波斯古

正史 姉妹のこころ



雁木階子ハ坑場の坑^{シキ}階^{シエ}木
蝦夷人の二井かりおる



四十四枚

